



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヒルファディング「金融資本」概念の再検討
Author(s)	上条, 勇
Citation	北海道大學 經濟學研究, 32(3), 229-267
Issue Date	1982-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31598
Type	departmental bulletin paper
File Information	32(3)_P229-267.pdf



ヒルファディング「金融資本」概念の再検討

上 条 勇

序

- I 『金融資本論』の理論構成
- II 金融資本と信用制度
- III 金融資本と「組織された資本主義」

序

(1) 周知のように、帝国主義分析において初めて金融資本概念を用いたのは、ヒルファディングである。彼が『金融資本論』(1910)で金融資本概念の定義を与え、レーニンが『帝国主義論』(『資本主義の最高段階としての帝国主義』1917)でその再規定を行なっている、金融資本は、今日まで経済学に欠くことのできない概念となっている。とはいえ、金融資本概念が種々の異論にぶつかり、その解釈も分かれ、この概念をどう現代資本主義分析に生かすべきか、必ずしもはっきりしていないのも事実である。それゆえに古典である『金融資本論』にたちもどり、金融資本概念について根底的に問いなおす作業の必要性は、依然として失われていない。とくに、ヒルファディングの金融資本概念がたびたび閑説される割には、『金融資本論』に内在して詳細にそれを考察しようという試みが意外と少ないゆえに。

これまで通説的には、ヒルファディングの金融資本概念は、レーニンの再規定によって止揚され、発展させられたと考えられてきた。かかる考えからすれば、それはレーニンの金融資本概念を理解するうえでのたんなる素材として意味をもつにすぎない。むしろレーニンの規定に照らして批判の対象をなすにすぎないと言った方がいい。

それに対して他方で、いろいろな立場からではあるが、金融資本概念において株式会社制度がどのような位置を占めるのか、ということも研究の関心を集めている。より根本的に金融資本と信用制度の関係も問われてきている。¹⁾ 私見では、こうした研究の流れからすれば、上述の通説的見解も含めてヒルファディングの金融資本概念は、もっと再検討されていいのではないかと思われる。というのは、彼の金融資本概念こそ、積極的に信用制度論の展開のなかで導出され、かかるものとして独自な特徴をもっているからである。小稿では、したがって、金融資本と信用制度、という問題関心から、ヒルファディングの金融資本を彼に内在して取り上げることにしたい*。本論にはいるまえに、まず必要なぎりぎりでこれまでの研究史を整理しておく。

* 小稿は、もともととは、拙稿「『金融資本論』と『組織された資本主義』論—方法論的考察—」(北大『経済学研究』第31巻第1号, 1981年6月)の続編として用意した。しかし、問題の性質上、「組織された資本主義」論という枠にはこだわらないことにした。なお小稿では、Rudolf Hilferding, *Das Finanzkapital*, Eingeleitet von Eduard März, Europäische Verlagsanstalt, Wien 1973を用い、引用などについては、本文中にページ数のみを示す。なお、林要訳、国民文庫版のページ数をも並記しておく。

(2) ヒルファディングは、長期的に固定化される形で、「現実には産業資本に転化されている銀行資本したがって貨幣形態の資本」を金融資本と名づけている。彼はまた、金融資本を「銀行が処理し、産業資本家が充用する資本」とも呼んでいる(Bd. 2, S. 309, (2) 89 ページ)。ヒルファディングのこの定義に関して、通説的には、彼の金融資本は、銀行が産業を支配する形でなされる銀行資本と産業資本の結合を意味するという解釈がなされてきた。そしてかかる解釈にもとづき、つぎのような批判がなされている。すなわち、それは、独占規定が欠落している点で不完全である。また、銀行による産業の支配を強調し、当時のドイツやオーストリアの特殊事情—とくに兼営銀行という特殊ドイツ的銀行タイプ—にもとづく銀行と産業の関係を一般化している点で不十分である。²⁾

こうした通説的解釈は、つぎのようなレーニン解釈と結びついている。す

なわち、ヒルファディングの定義は、レーニンの再規定によってより一般的に妥当する形に修正された。つまり、ヒルファディングが銀行の産業支配を一面的に強調したのに対し、レーニンは、より一般的に金融資本とは独占的銀行資本と独占的産業資本の融合・癒着であると規定しなおしたと考えられるのである。³⁾

この点、まったく別の立場から、つぎのような評価がくだされていることにも触れなければならない。すなわち、『金融資本論』の論理講成上、第一篇から第四篇までは、ヒルファディングは、明らかに金融資本を一般理論的に展開している。ところが、第五篇では、それに対して、金融資本概念が、イギリスではなく遅れて資本主義化の道をたどったドイツを典型として位置づけられている。これは、一般理論的展開とタイプ論的展開という、『金融資本論』の理論講造の断絶を意味する。かかる理解は、むしろ、タイプ論的見地にたって、金融資本の一般理論化の方向を批判する角度からなされている。⁴⁾

これまでのヒルファディング解釈は、おもに以上の方角でなされてきた。私は、こうした解釈と評価は、いささか表面的であると考える。すなわち、これらは、「銀行資本と産業資本の結合」の具体的内容について、ヒルファディングにそくして綿密に考察しているわけではない。むしろ、ヒルファディングの金融資本イコール「銀行が産業を支配する形でなされた銀行資本と産業資本の結合」という解釈を前提にして、そのうえに種々の判断や批判が加えられているにすぎない。この点、我われが彼の金融資本をたんに銀行と産業の組織的結合関係としてではなく、資本一般から発して高次の形態を獲得するにいたった「資本」—ヒルファディングは、「資本そのものがその最高段階では金融資本となる」(Bd. 2, S. 310, (2) 89 ページ) と表現している—という観点から理解するならば、もっと別なことがいえるだろう。⁵⁾ こうした角度から、ヒルファディングの金融資本について、すでにつぎのような解釈がなされている。

① ヒルファディングの金融資本は、端的にいえば、産業に対する銀行の貸し付け貨幣資本を意味するのであり、彼は、これを、資本調達面での産業

の銀行に対する一般的依存関係の発展とともに増大するものとみている。⁶⁾

(私はこれを仮に「金融資本＝貸し付け資本」説と呼ぶ)

② ヒルファディングの金融資本は、産業の株式会社における共同出資関係を内容としている。かかる共同出資関係において、銀行と産業が融合している資本形態、これが金融資本である。⁷⁾(私は、これを仮に「金融資本＝共同出資資本」説と呼ぶ)。

以上の解釈は、概して株式会社論に関する論者の立場と結びついていると考えられるが、ともに一面的であるといわざるをえない。とはいえ、かかる一面的解釈は、まったく理由なくして生じたのではない。むしろヒルファディングじしんの混乱や未整理、思考の未熟さに根ざしているように思われる。小稿では、ヒルファディングじしんのこうした混乱や未熟さを整理し是正しつつ、彼がいかなる意味で信用制度論の展開過程で新たな「資本」概念として金融資本を提起したのか、を考察してゆきたい。

- 1) この研究動向については、信用理論研究会編『信用論研究入門』有斐閣、1981年、第1部第4章第2節「金融資本と信用制度」(鈴木芳徳執筆)を参照。
- 2) 代表的論文のみあげると、大野英二『「資本類型」』とヒルファディング『金融資本論』の理論構成(『ドイツ資本主義論』未来社、1965年)、熊谷一男「ヒルファディング『金融資本』範疇の現実基盤について」(大野英二他編『ドイツ資本主義の史的構造』有斐閣、1972年)。なお、大野氏は、ヒルファディングの金融資本がライン・ヴェストファーレン重工業地帯の独占資本類型に着目して範疇規定されたものであると指摘している。

ヒルファディングじしんは、その後1924年の一論では、「イギリスの銀行業におけるこの集中はひとつの質的变化をともなっている。諸銀行はしだいに古典的なイギリス預金銀行の性格を失い、ドイツ銀行型に近づきはじめる」と述べるなど、彼の金融資本概念が各国で一般的に妥当するようになって見通していたようである(Trust und Kartelle in England, in: die Gesellschaft, 1. Jg., Bd. 1, 1924, S. 303)。

他方で、1930年の一論では、ヒルファディングは、注目すべきことに、金融資本において、「銀行資本が産業を絶対的に支配しているか、あるいは産業資本が絶対的従属性のもとにあるかどうかを考えるのは俗物のすることである。ここでは根本的に対立しあう利害が問題なのではなく、大部分同一的であるか並行的な利害が問題なのである」とも述べている。ヒルファディングは、同じ論文のなかで、銀行と

産業の関係に関する各国のタイプの相違を指摘している (Die Eigengesetzlichkeit der kapitalistischen Entwicklung, in: Kapital und Kapitalismus, Hrsg. v. Bernhald Halms, Verlag. v. Reimar Hobbing in Berlin, 1931, Bd. 1, S. 26-24, 拙訳「資本主義発展の固有の法則性」〈北大『経済学研究』第28巻第3号〉257-261 ページ)。

ヒルファディングの以上の考えを私なりに整理すると、『金融資本論』では彼は、ドイツを典型とし、他の国々がその後を追うだろうと予測して、金融資本概念を「定義」した。1924年の彼の論文も、こうした見通しのもとに書かれている。ところが、1930年の論稿では、当時のイギリスなどの現実をふまえ、ドイツを典型としつつ、定義ではより一般理論化の体裁を整える一方で、これを規準としながら各国の金融資本の類型的特点を強調するにいたったと考えられる。

- 3) たとえば、倉田稔『金融資本論の成立』青木書店、1975、第4章第1節を参照。
- 4) たとえば、降旗節雄『帝国主義論の史的展開』現代評論社、1972年、第4章第1節を参照。
- 5) この点、宮本義男氏は、金融資本を新たな資本範疇として提起するヒルファディングを批判し、むしろたんなる制度的関連として、銀行資本と産業資本の癒着を問題にすべきだと述べている (『金融資本への道』ミネルヴァ書房、1962年、231-233 ページ)。私は、宮本氏のように決めつけるまえに、ヒルファディングがいかなる意味で金融資本を新しい「資本」範疇として提起したか、を再検討すべきであると考える。
- 6) 本間要一郎「金融資本にかんする若干の諸問題」(『経済』No. 44, 1967年12月) 70-71 ページ、「段階規定の基礎範疇としての『独占』」(『講座経済学史—IV. マルクス経済学の発展』同文館、1977年、第3部第2章) 122 ページ。
- 7) 後藤泰二『株式会社の経済理論』ミネルヴァ書房、1970年、157-159 ページ、中田常男『『金融資本論』の論理構造』(『商学論纂』第19巻第1号、1977年5月) 107-111 ページ。

なお両氏とも、金融資本規定における固定資本信用(貸し付け資本)の位置づけをまったく無視したのではない。後藤氏は、固定資本信用を「二次的副次的なもの」とみなし、他方で中田氏は、その重要性をある程度認めている。

なお、ヒルファディングが、金融資本において、銀行による資本信用の授与と持株支配の両面から考え、とくに持株支配の面を重視していたという長坂聡氏の見解(「金融資本規定における銀行の役割」〈東京大学『社会科学論集』第6号、1959年〉13-14 ページ)も、如上の説に位置づけうるといえよう。

I 『金融資本論』の理論構成

周知のように、『金融資本論』は、貨幣・信用から説きはじめ、擬制資本

(株式会社)をへ、さらに競争・独占論を展開して、その上で金融資本概念を導出している。だから論理構成上、『金融資本論』は貨幣・信用論を軸にして叙述されているといえるが、それで首尾一貫しているわけではない。競争・独占論が論理的にどう位置づけられるかをめぐって、我が国では種々の議論が噴出している。この点、我われは、まずヒルファディングによる序文にそくして検討しておこう。

ヒルファディングは、序文で、マルクスのいわゆる下向法、上向法を模倣して、彼の研究・叙述方法を説明している。まず下向法では、彼は、金融資本の理論分析が、銀行資本と産業資本の関係、この関係を明らかにするうえで重要な株式会社、さらにその基礎たる貨幣・信用論の説明を必要とするとして述べる。注目すべきことに、ここでは、競争・独占論には言及されていない。

しかし、他方でいざ上向法的に叙述展開の仕方を説明する段になると、ヒルファディングは、下向法的説明とは論点がずれてゆくのである。すなわち、彼は、まず貨幣→信用→株式会社、と叙述の組み立てを論じてゆく。ところが、続いて、カルテル・トラスト形成に向かう産業の集積傾向を分析する必要性を述べた後、ただちに、カルテル・トラストによって恐慌が解消されるか否か、という問題に移っている。驚くべきことに、そこでは、金融資本が抜け落ちてしまっているのである(Bd. 1, S. 17-19, (1) 50-51 ページ)。

以上のごとく、ヒルファディングは、下向法的観点からは、信用論的理論展開を構想しており、そのなかで、あたかも競争・独占理論が論理的に「はみ出した」ものであるかのように取り扱われている。ところが、上向法的観点からすれば、『金融資本論』は、前半が貨幣・信用論、後半が競争・独占理論の展開と論理的に二分されているかのように説明される。かかる論理構成上の二分は、おそらく、ヒルファディングが第4篇の恐慌論までも含む『金融資本論』の叙述展開に統一的な印象をもたせようと腐心した皮肉な結果とも言えるだろう。だが、より根本的には、後述のごとく、独占と信用制度の関係、ひいては帝国主義論体系における信用制度論の位置づけに関する彼の

思考上の未整理によるものとも考えられる。こうしたことから、叙述展開上、肝心の金融資本概念が、論理的に浮き上がってしまい、その位置づけもきわめて曖昧なものになっている。我われは、以下、結論を先取りする形で、まずヒルファディングがいかなる観点から金融資本概念を取り上げたかを考察し、その上で『金融資本論』の理論構成について、より深く立ち入って検討することにした。

「マルクス経済学前史より」という論文のなかで、ヒルファディングは、マルクスが未整理のまま残した信用論の草稿に注目して、つぎのように述べている。

「……資本主義的信用について『資本論』第2巻および第3巻に述べられている詳論の多くは、それが金融資本の現代的発展のうちにその例解をみいだしたときはじめて、まったく重大な意義をもつことが明らかになったのである。そしてまさに、利子うみ資本にかんする輝かしい研究をふくむ第3巻第5篇……」⁹⁾

このことから、我われは、ヒルファディングが、信用制度論の具体的発展において、その現実的な「例解」として、金融資本概念を捉えていることをうかがい知る。これに関連して、ヒルファディングは、『金融資本論』の序文で、「資本関係一般にまつわる神秘的な後光は、ここでは〔金融資本では〕、もっとも見とおしがたいものとなる」(Bd. 1, S. 17, (1) 49ページ)と指摘している。また、「反射にすぎないのに独立してあらわれる金融資本特有の運動」とも述べている。すなわち、ヒルファディングは、ここで、資本物神について語っているのである。マルクスは、利子うみ資本が資本物神の完成をもたらすと考えた。ヒルファディングは、これを受けて、金融資本こそが資本物神を最高レベルに完成させると主張しているのである。我われの関心からすれば、そのさい、金融資本と利子うみ資本との関係が、当然問われなければならない。この点、ヒルファディングが、金融資本の定義において、金融資本が「貨幣形態での資本」とであると強調していることが注目される。ここでいう「貨幣形態での資本」とは、じつは利子うみ資本（貸し付け資本と株

式擬制資本の具体的形態で示される) のことであると考えてよい (Bd. 1, S. 322, (2) 105 ページを見よ)。以上のことから、ヒルファディングのいう金融資本は、その実体としては利子うみ資本を意味しているといえる。しかも、結論的を先取りしていえば、それは、単なる利子うみ資本ではなく、その「最高」の発展形態を意味すると解される。¹⁰⁾こう考えると、金融資本に関するヒルファディングの叙述がほとんど整合的に理解される。ヒルファディングの金融資本概念が利子うみ資本の「最高」形態として設定されていたこと、これを証明することが小稿の大きな課題となる。

* これに関連して、ヒルファディングの序文には、金融資本が「資本のもっとも高度な、もっとも抽象的な現象形態」であると述べてある (Bd. 1, S. 17, (1) 49 ページ)。「抽象的な現象形態」とは奇妙な表現であるが、この意味は、つぎのように解釈されよう。すなわち、「抽象的な」というのは、金融資本が近代資本主義を説明するうえで根本となるもっとも抽象的な概念であることを示している。換言すれば、銀行と産業の融合癒着といった現象的にも把握される金融資本を、より理論的に突っこんで、信用制度論の論理的延長線上に位置づけられる概念、つまり利子うみ資本の一形態として把握しようというヒルファディングの意図を示している。他方、「もっとも高度な」「現象形態」とは、金融資本が利子うみ資本の「最高」形態であり、『資本論』の論理的延長線上にあるもっとも具体的な概念であると、ヒルファディングが考えていたことを表している。この点、ヒルファディングは、『資本論』と『金融資本論』の論理的継承関係の軸を、信用制度論 (利子うみ資本論) に見出していたといえる。彼には、一種の「論理=歴史説」的な考えがあり、彼は、こうした考えから当時のドイツ・オーストリアの特殊事情を考慮しつつ、『資本論』の後部に位置し、未完の形で論ぜられた信用論に注目したと思われる。

以上、ヒルファディングは、金融資本を利子うみ資本の「最高」形態であると考えた。そして、マルクスが未完のまま残した信用論の草稿を、彼なりに整理し完成させようと試みた。そればかりか、当時の現実にくして、マルクス信用論を発展させようと意図したといえる。¹²⁾問題は、この整理の仕方発展のさせ方にある。マルクスの下向法・上向法を模倣するヒルファディングは、当然、抽象から具体へと信用論の論理展開を試みる。この論理展開は、しかし、あまり明瞭ではない。それを私なりに解釈すると、まず、つぎのごとく論理的に二つの流れが確認されよう。

第一に、「貨幣機能の変化から、流通手段より支払手段への貨幣転化から、うまれる信用」(Bd. 1, S. 83, (1) 135 ページ) に始まり、生産資本家たちの間で行なわれる信用という基本規定をへて、銀行制度の一側面として総括される流通信用の流れである。第二に、資本循環における貨幣資本の遊休→この遊休貨幣資本の機能貨幣資本への転化、というごとく、貨幣資本の形態的展開という形で論じられ、結局銀行制度のもう一つの側面として総括される資本信用の流れである。ヒルファディングは、まずこのように、二つの論理的脈絡で、流通信用と資本信用を導き出し、これらを銀行制度の二つの側面という形で総括し、これらの形態上機能上の相違を考察する。彼は、それから資本信用に重点をおいて叙述を展開し、資本信用、とくに固定資本信用として産業に投下され固定された貨幣資本の流動性回復(回収)を可能にするものとして、株式擬制資本を論じている。そして、競争・独占論をへて、結局、株式擬制資本による固定資本信用の「動化」をてこにして、金融資本を定義するにいたっているのである。

『金融資本論』の論理構造は、枝葉を切り落とし、基本的な道筋のみを示すならば、以上のように説明しうるであろう。つぎに、小稿の主題に必要なかぎり、このように示される『金融資本論』の論理展開が、いかなる問題をはらんでいたか、を指摘しておく。

いうまでもなく、マルクスが対象としたのは、産業資本主義段階の資本主義であった。それに対してヒルファディングの対象としたのは、帝国主義の段階である。信用制度論の展開において、ヒルファディングは、この関係をどう処理したのか? 彼は、前述のごとく、段階的差異を論理構成上に明確に反映させるといふよりも、むしろ抽象から具体へという論理的上向の道を選んだといえる。対象設定と方法論のこうした関係から、『金融資本論』の論理展開には、つぎのような特徴が生ずることになった。¹⁸⁾

すなわち、ヒルファディングは、産業資本主義段階に対応する形で信用制度論一般をまず論じ、その上になつて独占段階に対応する信用制度論を展開し、かくして彼の金融資本を導出するのではない。ヒルファディングにはか

かる区別はない。彼は、初めから帝国主義段階の資本主義を表象に浮かべ、上述のごとき段階区分を取り払い、独自に論理的に「組み換え」の操作を行ないながら、抽象から具体へと信用制度論の上向過程をたどるのである。¹⁴⁾そのさい、概念の上向的展開の動力は、帝国主義段階の表象によって規定される。つまり帝国主義段階を表象に浮かべているからこそ、固定資本信用という段階的範疇も、株式会社論のまえに、その前提として、一般論的展開のうちに叙述することが可能となるのである。ちなみに、こうしたことから『金融資本論』では、抽象から具体への論理的展開の各個所で、帝国主義の諸現象などが取り入れられる。たとえば、貨幣論では、自由鑄造の禁止や純粹紙幣本位制、株式会社においては人的結合などがあげられよう。

『金融資本論』は以上のような論理構成上の特徴をもつといえる。しかし、ヒルファディングのこうした考えは、『金融資本論』に大きな問題を残すことになった。問題は、何よりもヒルファディングの株式会社論に集中して現われる。株式会社制度が一般化するの、周知のごとく、独占段階である。正確に言えば、株式会社は、独占形成において重要な役割を果たすと同時に、それじたい独占資本の企業形態として固有の意義を獲得する。ヒルファディングが「近代資本主義の発展は株式会社の勝利とその根拠なしにはまったく理解できない」(Bd. 1, S. 136, (1) 205 ページ)と述べたとき、彼はこのことを意識していたはずである。にもかかわらず、彼は、株式会社制度を、独占段階に対応した信用制度の高次の展開に結びつけ、そのなかに組み込んでいるのではない。むしろ彼は、抽象から具体への論理展開のなかで、それを一般論的に展開している。だからこそ、彼は、「一般利潤率」を規準にして株式会社論を論ずるのである。株式会社を独占資本の企業形態だと捉える観点からすれば、この点は大いに疑問のあるところだろう。ところがヒルファディングにあっては、独占形成および独占論は、第三篇になって初めて論じられる。こうした論理構成からして「一般利潤率」を規準にしてしか¹⁵⁾株式会社論を説きようがない。

他方で、ヒルファディングは、株式会社制度の固有な歴史的な性格を、一般論

的叙述展開のなかになし崩し的に混入させている。たとえば、前述のごとく、人的結合がそうである。人的結合は、ほんらい独占を前提にせずして説きえないものであり、金融資本における銀行と産業の融合の具体的態容のひとつをなしていることはいうまでもない。ところが、ヒルファディングは、人的結合を一般論的展開に混入させる形で、早めに説いてしまったので、肝心の金融資本概念を説明するところでは、それを十分に生かしえなくなっている。

以上のごとく、ヒルファディングが帝国主義の諸現象を表象に浮かべ、抽象から具体へと信用論を展開する形で、『金融資本論』の論理構成を考えたことは、大いに問題を残した。この問題は、彼の株式会社論の位置づけや理論的性格に集中的に現われる。さらに、加うるに『金融資本論』の論理構成上、信用論的展開を貫くとすれば、独占を取り扱った諸章が、論理的にはみだした形で挿入されざるをえない。ところで、ヒルファディングは、なぜ独占に関する諸章を取り上げざるをえなかったか？ その大きな理由は、いうまでもなく、彼が帝国主義の諸現象を研究対象とし、独占がなかでも重要な位置を占めていたからである。だが、それのみにつきるのではない。たとえ金融資本が利子うみ資本の転化した形態、信用の最高段階として生じたとしても、この転化が行なわれるのは、独占および独占形成を基盤として以外にありえないからでもある。換言すれば、ヒルファディングが、支配的資本としての金融資本が産業における独占化と銀行における独占化の相互連関的な前進を考慮せずして導出されえないと考えたからだといえよう。

そのさい、注意すべきことに、ヒルファディングは、前述のごとく、産業資本主義段階と独占資本主義段階の区別を論理的区別に反映させているのではない。だからこそ、独占に関する諸章が論理的にはみ出さざるをえないのだが、ヒルファディングは実際にはこれらの章をはみ出したものと位置づけているわけではない。むしろ既述のごとく、『金融資本論』の理論の部を、貨幣・信用論を基軸にする第1～第2篇と独占を基軸にする第3～第4篇とに二分するかのように自ら取り扱っている

その結果、『金融資本論』における信用論の抽象へから具体への展開は、独

占論の論理展開のなかに先細りする形で突きささっているかのようである。つまり、独占段階に対応する形での信用制度論は、すでに抽象から具体への先行する信用論の展開のうちに先取的に混入されているがゆえに、第3篇で十全に論じられていない。そこではせいぜい銀行による独占の促進作用とか、利子率の均等化とかが断片的に語られているにすぎない。それゆえに、ヒルファディングは、信用制度論と金融資本概念の関係、ひいては独占と金融資本概念の関係を明確に示していない。金融資本概念が信用制度論と深くかかわり、むしろその論理的延長線上に説かれているにもかかわらず、この点を明示していない。つまり、利子うみ資本の「最高」形態としての金融資本の性格を浮き彫りにしていないのである。我われは、ヒルファディングが金融資本の定義を述べた叙述個所の抽象性—しばしば独占規定の欠落という点で批判される—と競争と独占を直接に対象としたその前後の脈絡の具体性との間に大きな齟齬を見出さざるをえないのである。結論的にいえば、以上の論理構成上の問題こそ、彼による金融資本の定義の難解さを生み出し、ひいては彼の金融資本概念に関する種々の解釈の発生を招いたといえる。

- 8) 拙稿『『金融資本論』と「組織された資本主義」論—方法論的考察—』（前掲）、129ページを参照。
- 9) Hilferding, Aus der Vorgeschichte der Marx'schen Ökonomie, in: die Neue Zeit, 29. Jg., Bd. 2, 1910-1911, S. 573. 玉野井・石垣訳『マルクス経済学研究』法政大学出版局、1968年、3-4ページ。
- 10) 飯田裕康氏は、擬制資本信用を信用の最高範疇とみなしているが（『貨幣・信用論』同文館1976年、246-247ページ）、ヒルファディングは、この擬制資本信用にもとづき、さらに金融資本を利子うみ資本の「最高」形態として設定したといえよう。
- 11) この点、森岡孝二氏は、つぎのように解釈している。「……現象形態とは一般に事物の本質があれこれの形態をとって表面に現われたものと理解される。そうであれば、金融資本の本質は銀行資本や商業資本の概念もそこから導かれる産業資本の概念のうちに、つまり資本の一般的概念のうちに求められるのではないか？」金融資本を資本一般の現象形態と直接みなすならば、金融資本を本質的に新しい資本範疇として定立しようとする『金融資本論』の目的じしんを否定することにならないか、と（『独占資本主義の解明』新評論、1979年、56-57ページ）。

しかし、ヒルファディングは、金融資本概念を直接資本一般の現象形態として導

出したのではなく、むしろ利子うみ資本の高次で具体的な形態として定立していると考えられる。

- 12) 倉田徳氏や保住敏彦氏の研究によると、ヒルファディングは、1906年3月10日付のカウッキー宛の手紙では、『金融資本論』第1篇の貨幣・信用論研究の大部分を、『資本論』第2巻・第3巻の再生産的な叙述で、あまりおもしろくない仕事であると述べている(倉田『金融資本論の成立』青木書店、1975年、21ページ、保住「『金融資本論』執筆時のヒルファディング—ヒルファディングのカウッキー宛の手紙(1902-1907)を中心に—」(2)(愛知大『法経論集 経済・経営篇』第98号、1972年1月、154ページ)しかし、ヒルファディングが、『資本論』の単なる再生産ではなく、彼独自の「組み換え」と発展を加えつつ、この仕事を行なっているのは、本文中に示したごとくである。
- 13) 以下の考察にあたって、一直接ヒルファディングを取り扱っているわけではないとはいえ一生川栄治「金融資本の論理構造」(『経営研究』第30巻第3・4合併号、1979年11月)から大いに示唆を得た。
- 14) この点、鈴木芳徳氏は、以下のごとく述べている。
「……資本信用なり発行業務なりは、銀行の本来的な業務からすると一定の歴史的発展の経過をふまえてのみ出現するものであって、したがってそこでは歴史的発展の中に身を置くものとして銀行が問題とされる必要がある……ところがヒルファディングにあつては、資本制生産における一般的抽象の規定と、一定の歴史的段階的な規定とが、無差別無原則的に連続させられているのであって、一方では特殊歴史的な規定をもって一般の規定とするとともに、他方では一般の規定をもって直接に特殊歴史的規定を律するのである。」(『信用制度と株式会社』新評論、1974年、204-205ページ)。
- 15) 中村通義氏は、ヒルファディングが対象としている株式会社が独占資本主義段階に対応したものであるという観点から、ヒルファディングが「一般的利潤率」を基準としていることに大いに疑問を唱えている(『株式会社論』亜紀書房、1969年、174-177ページ)。

Ⅱ 金融資本と信用制度

(1) 定義の解釈

周知のように、ヒルファディングの金融資本概念にたいして、レーニンは独占規定の欠落を指摘している。しかしレーニンは、定義の前の2章では、資本主義的独占体の役割が強調されているという但し書きをも付与している。この点、ヒルファディングは、「前の2章」どころか、定義を行なった章の

なかでも、「資本主義的独占と銀行資本の金融資本への転化」というその表題が示しているように、独占を基底においた叙述を行なっている。つまり、彼は、この章で、「カルテルやトラストはこんどは銀行制度にどう作用するか」と問題を設定し、銀行の集積と産業の集積の相互作用による銀行と産業の関係の緊密化をてこにして、彼の金融資本概念を導出しているのである。以上のことから、ヒルファディングが定義で独占を欠落させたことは、一見信じがたい。なぜヒルファディングは、定義のなかで独占を欠落させたのだろうか？ 以下、定義を取り上げ、金融資本と信用制度の関係を論じるなかで、この問題に答えてゆくことにしたい。

* ヒルファディングによる金融資本の定義において独占規定が欠落した理由について、管見のかぎりでは、つぎのような代表的な解釈がある。

① ヒルファディングが流通主義におちいり、金融資本の発生を主として流通部面の内部であられる過程からみちびきだしたためである（エルスナー「新版序文」『金融資本論』林要訳、国民文庫版（1）37-38ページ、古沢友吉「ヒルファディング『金融資本論』の現代的意義」越村信三郎他編著『独占資本論への道』同文館、1969年、第1編第1章27ページ）。

② ヒルファディングが信用一元論的傾向におちいり、その結果、「独占形成の論理をなすものが、銀行の産業支配の論理に吸収され、最終的に定義の中で欠落してしまった」ためである（星野中「ヒルファディング『金融資本論』の基本的構造とその問題点—研究史上の位置との関連において—」内田義彦他編『資本主義の思想構造』岩波書店、1968年262、273ページ、保住敏彦「ヒルファディングの帝国主義論—『金融資本論』の背景・特徴・位置について—」同志社大学『社会科学』第4巻第2号、1971年52ページ）。

③ 「ヒルファディングが株式資本の原理規定から直接的に株式資本の普及という段階論的に解明されるべき問題に移っていった」ためである。つまり、ヒルファディングは、原理論と段階論を区別せず、その結果、重工業における固定資本の巨大化と組織的独占体の形成との関連で株式会社論を展開しえなかった。金融資本概念もかかる段階的な株式会社論から展開されるべきだったが、上記の理由から、ヒルファディングがこれをなしえなかったために、定義のさいに独占規定が欠落することになった（宇野弘蔵「ヒルファディング『金融資本論』における原理論と段階論との混同について」『経済学方法論』東京大学出版会、1962年、90ページ）。

なお、ヒルファディングの金融資本規定が産業的独占との関連で与えられているのは明確であり、定義における独占規定のドロップじたいはさほど重要なことではない

という見解もある（静田均「金融資本の概念と本質」〈『経済論叢』第77巻第3号〉327-330ページ、鈴木鴻一郎「〈解題〉ヒルファディングの金融資本規定を中心にして」〈有沢・脇村共著『カルテル・トラスト・コンツェルン』御茶の水書房、1977年〉572-573ページ）。その後、ヒルファディングは、幾度か金融資本規定に触れる機会があったが、ほとんど『金融資本論』中の定義を繰り返している。ただ例外的に、「金融資本—少数巨大銀行による独占的に組織された産業の支配—」と述べたこともある（Arbeitsgemeinschaft der Klassen?, in: Der Kampf, 8. Jg., 1915, S. 322）。私は、彼が定義で独占規定を欠落させた理由は、以下に述べるごとく、新たな「資本」概念としての彼の金融資本の性格そのものにあると考える。

まず、ヒルファディングが金融資本の定義を行なった叙述個所を引用しておこう。

「……銀行はその資本のますます多くの部分を産業に固定せざるをえない。これによって銀行はますます多く産業資本家となる。このような仕方では、現実には産業資本に転化されている銀行資本したがって貨幣形態の資本を金融資本と、わたしは名づける。それは所有者たちにとってはつねに貨幣形態をたもっており、かれらはそれを貨幣資本、利子うみ資本の形態で投下しているのであって、いつでも貨幣形態で回収することができる。」（Bd. 2, S. 309, (2) 88-89ページ）

ヒルファディングによるこの金融資本の定義は、既述のごとく、銀行による産業の支配、あるいはこの支配下での銀行資本と産業資本の融合を内容とするものだ、とこれまで解釈されてきた。私は、一步進んで、信用制度論との関係で金融資本概念が把握されなければならないと考える。かかる観点から、定義は、さしあたって、つぎのように解釈される。

すなわち、銀行は、固定資本の巨大化にともなう産業資本の要求に答えるために、固定資本信用の供与をますます増大させる。ところが、固定資本の価値は長期にわたって徐々に還流する性格をもち、したがって固定資本信用は長期信用たらざるをえない。だから、銀行は、「その資本のますます多くの部分を産業に固定せざるをえない」のである。しかし銀行資本は、その性格上、流動性を保つことが要求され、産業へのその長期的な固定化は、銀行資本にとって自己否定を意味する。つまり「これによって銀行はますます多

く産業資本家となる。」この事実、固定資本信用の供与の場合にも、産業における株式会社に直接的に共同出資する場合にも示される。

貨幣資本のうち払い戻しをただちに要求されず「銀行の手もとに充分長くとどまる部分」がこれを可能にするとはいえ (Bd. 1, S. 118, (1) 182 ページ)、銀行は産業資本家になると同時に、つねにその資本の流動性を回復し、自己を取り戻すことを要求される。銀行資本の流動性回復を保障するものが、株式発行による産業資本の動化である。この動化は、同時に、固定資本信用として産業に供与された銀行資本の流動化をも意味するのである。これらの動化が成立するための前提は、もちろん株式擬制資本の流通市場つまり証券市場の存在である。かかる株式擬制資本の流通メカニズムの存在によって初めて、ヒルファディングがいうように、産業に投下した資本は、「所有者たちにとってはつねに貨幣形態をたもって」いる。固定資本信用の形で貸し付けられた資本であろうと、直接株式資本の形で投下された資本であろうと、この点に関して、ほとんど差違はない。つまりいずれの場合でも所有者たちは、その資本を「貨幣資本、利子うみ資本の形態で投下しているのであって、いつでも貨幣形態で回収することができるのである。」このようにいつでも貨幣形態で回収できる形で、しかも多くの部分産業に長期的に固定される仕方、で、「現実に産業資本に転化されている銀行資本したがって貨幣形態の資本を金融資本」と、ヒルファディングは名づけているのである。

ヒルファディングの金融資本は、以上のごとく固定資本信用と株式会社制度（株式擬制資本）を軸にして導き出されている。そして金融資本の実体が貨幣資本、利子うみ資本であることは、以上の解説からすでにうかがわれている。しかし、我われは、他方で、定義においては、信用制度と金融資本の関係が必ずしも明示されていないといわざるをえない。奇妙なことに、定義のなか、そのみか定義が行なわれた章のなかで、固定資本信用については一言も費やされておらず、したがって例の「動化」の問題にも言及されていないのである。定義を行なった叙述箇所は、妙に抽象的で舌たらずであり、しかも前後の脈絡から多少浮きあがっているかのような印象を与えている。

このことは定義を難解なものにし、ヒルファディングの金融資本概念について、種々の解釈を生み出す原因となっている。ヒルファディングがこうした定義を行なった理由は、じつは、前の節で検討した、『金融資本論』の理論構成上の混乱にかかわっているといえる。すなわち、ヒルファディングには、独占段階に対応する形で信用制度論を一独占理論を踏まえたうえで展開する意図があきらかに欠如している。その展開は、抽象から具体へと基本的には一般論的になされる信用論の叙述過程のなかに立ち消えてしまった。その結果、第3篇では、信用制度論に明確な位置づけが与えられず、したがって独占段階に対応させて、固定資本信用と株式会社制度の関係を述べ、それを基軸として金融資本が成立するという形では、理論展開を行なうことができなかった。こうした混乱や未熟さから、ヒルファディングの金融資本概念は、利子うみ資本の「最高」形態としてはっきり示されえなかった。我われは、彼の金融資本の性格を明確に示すために、多くの補足と読み込みを混えながら、金融資本と信用制度の問題に焦点をすえて、必要なかぎり『金融資本論』を整理し検討しなければならない。

(2) 資本信用と株式会社

第1篇は、貨幣論から始まり、流通信用と資本信用の規定をへ、利子率の説明でもって終わっている。第2篇「資本の動化。擬制資本」との関連から言えば、資本信用とくに固定資本信用が注目されよう。

ヒルファディングによれば、「資本信用とは、休息貨幣資本を機能貨幣資本に転化する貨幣の移転のことである」(Bd. 1, S. 109, (1) 171 ページ)。すなわち、休息貨幣資本を機能貨幣資本に転化するうえで、「この分配の労をとるのが資本信用である」(Bd. 1, S. 126, (1) 193 ページ)。このように、ヒルファディングは、遊休貨幣資本を機能貨幣資本に転化するうえでの媒介機能に注目して、資本信用を規定するのである。そのさい、彼は、遊休貨幣資本がまず利子をうむ資本となることには、ほとんど触れていない。つまり利子うみ資本規定を行なうことなくして、いきなり資本信用の説明にはいつているのである。この事実を把えて、『金融資本論』には利子うみ資本論が

ないと批判する論者もいるが、これは極論であらう。¹⁶⁾むしろ、『金融資本論』では、それ自体としての利子うみ資本論は一定の理解のうえで、前提にされている¹⁷⁾といった方がいい。このことは、『金融資本論』に利子うみ資本に関する叙述が散見されることからいえる。¹⁸⁾とはいえ、ヒルファディングが、貨幣資本の媒介機能に注目するあまり、利子うみ資本規定をへずして資本信用を定義したことは、信用制度論の論理構成上、大いに疑問を残したといわざるをえない。¹⁹⁾これは、後述のごとく、利子うみ資本の「最高」形態としての金融資本の性格をきわめて曖昧にすることに結びついたのである。

ところで、資本信用とくに固定資本信用は、株式会社制度と交互計算業務の成立をまっぴらして一般化する。²⁰⁾この点、資本信用は、株式会社制度を前提にしつつ、その論理を先取りする形で論じられている。これは、帝国主義を表象に浮かべながら抽象から具体へと叙述をすすめてゆく、ヒルファディングの意図にそったものであらう。叙述は、こうして資本信用から株式会社制度へと展開してゆくが、かかる叙述展開の仕方は、ヒルファディングの株式会社論の性格そのものを規定することになる。

ヒルファディングは、株式会社論を、「資本の動化。擬制資本」というテーマの一部として論じた。このことは、彼が株式会社論をおもに株式擬制資本の観点から論じるつもりであったことを示しているといえる。ヒルファディングのこうした意図は、まさに彼の金融資本規定と密接にかかわっていると考えられる。彼にあっては、金融資本とはいつでも貨幣形態で回収可能な形で産業資本に長期にわたり固定的に転化されている銀行資本である。このように金融資本を規定するためには、前述のごとく、株式発行による産業資本の動化、銀行の立場からすれば、産業に固定資本信用として供与した貸し付け資本の流動化を保障するメカニズムが必要不可欠の前提であった。それゆえに、株式会社論は、株式擬制資本を中心に構成され、『金融資本論』全体の論理構成からみれば、銀行資本（利子うみ資本）→株式擬制資本→金融資本という基本線のうえに位置づけられていると考えられるのである。ただし、そのさい、独占ひいては金融資本と信用制度の関係などについてのヒ

ルファディングの混乱や未整理もあって、このことは必ずしも明瞭に示されておらず、彼の株式会社論に関して種々の解釈を生み出すことになったのである。

さて、以上の論理的位置づけを踏まえてヒルファディングの株式会社論の冒頭部分をみるならば、その意味するところは明白である。つまり、ヒルファディングは、株式会社が産業資本家をして産業の企業機能から解放し、そして産業資本家の「このような機能変化は、株式会社に投下される資本に純貨幣資本の機能—その資本家にとって—」を与えるとして述べている。そして株主と貨幣資本家の異同を比較考察している。ここで彼が力点をおくのは、株式擬制資本の流通メカニズムの存在によって、「株式形態で投じられた貨幣資本に貸し付け資本すなわち利子うみ資本の性格を主観的にあたえる」仕組である。「貨幣資本が同時に擬制資本となり、したがってその所有者にとって貨幣資本の形態をもちつつ」ける論理である。これによって「貨幣資本家はその資本を株式形態で投ずる場合でも、やはり貨幣資本家の性格をもつ」ことになる (Bd. 1, S. 136-140, (1) 206-211 ページ)。

ヒルファディングの叙述のこの部分にたいしては、群小株主の観点から株主をみ、そして「株主をたんなる貨幣資本家」とみなしているという批判がある。²⁰⁾しかし、我われは、ここでヒルフェディングが貨幣資本家的側面を強調する形で株主一般の特徴を説明していると考えた方が²²⁾いい。問題は、なぜヒルファディングが株主の貨幣資本家的側面を強調したかにある？ この回答は、金融資本規定との関連を問うことによって与えられる。つまり彼の「株主＝貨幣資本家」論は、じつは「株主＝巨大銀行」論を意識して唱えられたのである。前述のごとく、銀行資本が銀行資本の性格を失わずに産業に長期的固定的に投下されるためには、株式発行による資本の動化のメカニズムが必要であった。産業に固定的に投下された銀行資本（固定資本信用）は、将来株式資本に転化しうる。そしてこの株式資本は、随時売却可能である、つまり擬制資本であることによって、貨幣資本の性格をもつ。かかる観点からすれば、産業資本家の企業機能からの解放とは、具体的には産業に長期的

固定的に資本投下を行なうことによって産業資本家とならざるをえない銀行が貨幣資本家としての性格、銀行としての地位を回復することを意味している。株主の貨幣資本家化は、具体的には、銀行の銀行としての地位回復を説明する意味をもっている。だから、前掲のヒルファディングの叙述は、群小株主とともに銀行をも具体的イメージにもって、株主を説明したものであるといえよう。

以上、我われは、ヒルファディングの株式会社論の冒頭部分を検討してきた。そこでは株式資本の擬制資本化、すなわち動化が述べられている。ヒルファディングは、つづいてかかる資本の動化にもとづき、資本の動員を説明していくことになる。結論的にいえば、ヒルファディングの株式会社論は、銀行資本（利子うみ資本）→株式擬制資本→金融資本という『金融資本論』の理論構成において、株式資本の動化、銀行の立場からすれば、長期的に固定的に投下した貸し付け資本の流動化—合わせて創業者利得の獲得—を中心として、機能論的に展開されているのである。

かかるヒルファディングの株式会社論にたいして、我われはいかなる評価をくださべきだろうか？ 周知のごとく、株式会社それ自体は、信用制度の直接的産物とみることとはできない。株式会社は、資本の再生産過程の発展にともなって、資本とくに独占資本の企業形態として、それ自体、結合資本の発達した形態として成立するのである。²³⁾だが、他方では、株式会社制度は、信用制度の発展、とくに株式擬制資本の発行・流通市場の成立と結びついて、十全な展開をえる。²⁴⁾この意味で、株式会社制度は、信用制度論に包摂されるのである。ヒルファディングは、この関係を明確にせずして、「株式擬制資本」の論理に包摂する形で、株式会社論を論じた。その結果、確かに「株式会社は資本家たちの会社である」（Bd. 1, S. 153, (1) 230 ページ）という表現にあるように、ヒルファディングが結合資本としての株式会社の論理を踏まえ、それを前提としていたとはいえ、この側面は、彼の株式会社論では必ずしも明快な形で論じられなかった。企業形態として株式会社を説明する場合であっても、彼は、個人企業と株式会社の機能上の相違に力点を²⁵⁾おいている。

彼は、株式会社と信用制度の関係についてまず、株式資本の擬制資本としての性格を説き、株式擬制資本の成立の説明については、「この傾向は株が取引所でいつでも売却できることによって完成される」(Bd. 1, S. 146, (1) 218 ページ) と述べ、証券取引所論の課題としてしまっている。とはいっても、この課題が十分に果たされているとはいえない。そもそも証券市場の成立、株式会社と信用制度の関係は、独占の問題をぬきにしては語れないのである。それに対して、ヒルファディングは、前節で検討したように、信用制度論の論理展開に段階的の区別を設けず、抽象から具体への叙述の上向過程でなし崩し的に一般論的に株式会社論を論じているのである。その結果、株式会社と信用制度の関係を明確にしえず、そのみか金融資本と株式会社の関係をも曖昧に²⁶⁾してしまっている。後者についていえばだからこそ、我われは、ヒルファディングが、産業に長期的固定的に投下された銀行資本の流動化、銀行資本の貨幣資本としての性格の回復を説明するために、株式擬制資本論を中心に株式会社論を展開したと、ここで改めて確認せねばならなかったのである。「……貨幣資本が同時に擬制資本となり、したがって、その所有者にとって貨幣資本の形態をもちつづけており、したがって右の転化の形式がここでは本質的だ」(Bd. 1, S. 144, (1) 215 ページ) というヒルファディングの言葉は、金融資本概念を検討するさいに、初めて生きてくるといってよい。

(3) 利子うみ資本の「最高」形態としての金融資本

ヒルファディングは、前述のごとく、産業に長期的に固定化されるような仕方で「現実には産業資本に転化されている銀行資本したがって貨幣形態の資本を金融資本と、わたしは名づける」と述べている。これによると、金融資本は、「銀行資本したがって貨幣形態の資本」である。それでは、金融資本は、単純に銀行資本と同一視されていいのか？²⁷⁾ 結論を先取りしていえば、金融資本は、銀行資本ではあるが、たんなる銀行資本ではなく、特別な形態をもつ銀行資本なのである。金融資本規定において、我われは、「産業に長期的に固定化される」という点に注目せねばならない。この点、少し立ちいって検討することにした。

「資本主義発展の固有の法則性」(1931)という論文において、ヒルファディングは、「ふつう金融資本は単純に銀行資本と同一視されている。しかし私はそれを組織された資本主義において支配的になった資本形態と理解する」と述べ、また、別の論文では、金融資本が²⁸⁾かって分離されていた産業資本・商業資本・銀行資本を統一するに²⁹⁾いたった資本形態であると指適している。「組織された資本主義の支配的な資本形態」として指適されたこの金融資本は、『金融資本論』のそれと同じものであろうか？ それともそこに概念上の重大な修正がみられるのであろうか？ この点、私は、ヒルファディングの見解に重大な変更はないと考える。というのは、後述のごとく、商業資本・産業資本・銀行資本を統一する資本形態を金融資本とする見解は『金融資本論』にも散見されるからである。我われは、むしろ、この点にこそ、利子うみ資本の「最高」形態としての金融資本の性格を解く鍵を見出さねばならない。これに関連した叙述二つを、我われは、『金融資本論』から引用し、若干の解説を加えておこう。

「産業利潤は商業利潤を併合し、みづからが全体として資本還元されて創業者利得となる。つまり金融資本として最高の資本形態にまで達した三位一体者の獲物となる。産業資本は父神で、それが商業資本・銀行資本を子神として解放したのであり、貨幣資本は聖霊であるが、それらは三つでありながら、しかも金融資本においては一つとなっているからだ。」(Bd. 2, S. 303, (2) 81 ページ)

これは、第13章「資本主義的独占と商業」中の一節である。その意味するところは難解であるが、一応つぎのように解釈される。信用関係の発展につれて、自己資本と他人資本の両方合わせて、産業資本や商業資本のなかに占める銀行資本の比重が高まり、かかる状態は一時的でなく恒常的なものとなる。銀行資本をなすものは貨幣資本である。この貨幣資本は、その抽象的性格によって、信用関係を通じて銀行資本・商業資本・産業資本の共通項となり、共通項となることによって三者を統一し、最高の資本形態として金融資本を形成する。ヒルファディングは、こうした意味をこめて、貨幣資本を

「聖霊」にたとえていると考えられる。この貨幣資本の役割について、ヒルファディングは、別の個所で、より明確につぎのように述べている。

「金融資本においては、いっさいの部分的な資本諸形態が全体性に統一されてあらわれる。金融資本は貨幣資本としてあらわれ、そして事実上、貨幣資本の $G-G'$ なる運動形態、つまり貨幣をうむ貨幣、すなわち資本運動のもっとも一般的な、もっとも把えどころのない形態をもつ貨幣資本として、それは貸し付け資本と擬制資本との両形態で生産資本家に融通される。これが媒介にあたる銀行は、同時にますます多くの部分を自己資本に転化しようとし、それによって金融資本に銀行資本の形態をあたえる。この銀行資本は、現実に機能する資本すなわち産業資本の端的な形態—貨幣形態—となる。同時に商業的資本の独立性はますます排除されるが、銀行資本と生産資本との分離は金融資本において止揚される。」(Bd. 2, S. 322-323, (2) 105-106 ページ)

つまり、ヒルファディングは、ここで金融資本の実体が貨幣資本であると述べ、 $G-G'$ 運動を通じて銀行資本・商業資本・産業資本を統一する貨幣資本を金融資本と呼んでいるのである。ここでは、貨幣資本は、貸し付け資本と擬制資本の二つの形態で考えられている。したがって、金融資本は、図式化して示せば、つぎの二つの運動形態をもっているといえる。

$$(1) \quad G - \{G - W \cdots P \cdots W' - G'\} - G'$$

$$(2) \quad \begin{array}{c} G - A : A - G - W \cdots P \cdots W' - G' \\ | \\ G' \end{array}$$

(1) は、貸し付け資本形態、(2) は、株式擬制資本形態（共同出資などの場合）である。

そのさい、(1) の場合であっても、産業資本として現実機能資本に転化した貨幣資本は、株式発行による資本の動化によって、いつでも株式擬制資本の形態を獲得しうる。この意味で「潜在的擬制資本」といってもよい。だから、いずれの形態であっても、銀行は、投下資本がつねに貨幣資本としての流動性を保っているとみなすことができる。つまり、銀行資本は、現実機能

資本と株式擬制資本への資本の二重化のメカニズムに支えられて、現実には機能資本として産業資本の構成部分化しながら、貨幣資本の形態を保っている³⁰⁾と自ら考えることができるのである。このような資本の二重化メカニズムに支えられて、産業資本・銀行資本・商業資本を、これらの共通項をなすことによって統一する貨幣資本（ここでは事実上利子うみ資本）が金融資本である。したがって金融資本は、たんなる貨幣資本ではなく、三者の資本を統一するものとして、新しい形態の規定性を獲得した貨幣資本である。つまり、金融資本は、銀行資本をアウフ・ヘーベンした貨幣資本（利子うみ資本）の最高でもっとも完成された形態を意味するといえる³¹⁾。こうした理解にたつて、はじめて、ヒルファディングのつぎの表現の意味が明らかとなる。

「ヘーゲル学徒なら否定の否定として、こういうかもしれない。——銀行資本は高利貸し資本の否定だった。そして、それじしんが金融資本によって否定される、と。金融資本は高利貸し資本と銀行資本との総合^{ジンチャーゼ}であって、経済的發展のかぎりなく高い段階において社会的生産の果実を自分のものとする。」(Bd. 2, S. 310, (2) 91 ページ)

この意味は、貨幣資本、つまり利子うみ資本が最初高利貸し資本、つぎに銀行資本、そして最後に金融資本と、形態的發展をとげるところにある。高利貸し資本として貨幣資本は、かつて生産者に寄生しそれを支配する立場にあった。が、銀行資本としての貨幣資本は、産業資本に対して従属的地位に置かれる。それに対して、金融資本として貨幣資本は、後述のごとく、再び産業資本に対する支配的地位を獲得するのである。これが、ヒルファディングによる、否定の否定、総合^{ジンチャーゼ}の意味なのである³²⁾。この否定の否定を可能にするのは、株式会社と証券市場の発達による資本の二重化メカニズムである。金融資本は、この資本の二重化メカニズムを通して、じしん現実に機能する資本と株式擬制資本に二重化しつつ存在する「貨幣資本」の運動体（事実上利子うみ資本の新たな形態）である。我われは、このことから、株式会社論でヒルファディングがなぜ執拗に株式擬制資本と貨幣資本の同一性を強調したか、その意味を理解することができるといえよう。

* これまで我われは、—これが利子うみ資本の「最高」形態としての金融資本の性格を曖昧にする大きな原因の一つとなったのだが—ヒルファディングが貨幣資本をたびたび利子うみ資本の意味で用いていると指摘してきた。この点、ここで一言費やしておく必要があるだろう。

ヒルファディングは、第4章「産業資本の流通における貨幣」において、正当にもまず、商品資本、生産資本、貨幣資本といった、資本循環でとる資本一般の三形態の一つとして貨幣資本を明らかにしている(Bd. 1, S. 81-82, (1) 133 ページ)。彼は、第二に、産業資本の流通過程でいかに貨幣資本の周期的な遊離と休息が生じるかを示し、いわゆる遊休貨幣資本の規定を導き出している(Bd. 1, S. 84-90, (1) 137-145 ページ)。ヒルファディングは、第三に、「信用による休息貨幣資本の機能貨幣資本への転化」を述べ(Bd. 1, S. 96-98, (1) 153-155 ページ)、結局、「資本信用とは、休息貨幣資本を機能貨幣資本に転化する貨幣のことである」(Bd. 1, S. 109, (1) 171 ページ)と規定するにいたっている³³⁾

この場合、既述のごとく、ヒルファディングは、明らかに資本信用を銀行の機能の観点から説いている。つまり、銀行が休息貨幣を自己に集中し、それを産業に機能貨幣資本として貸し付ける媒介機能に着目して資本信用を説いているといえる。そのさい利子うみ資本の規定は、触れられておらず、むしろ前提とされている。そうになったのは、ヒルファディングがいきなり銀行の立場から機能論的に資本信用を論じたためであると考えられる。その結果、『金融資本論』における利子うみ資本論の位置づけは非常に曖昧になった。だからこそ、ヒルファディングは、ほんらい利子うみ資本と述べるべきところにも、貨幣資本という言葉を用いている。その結果『金融資本論』では、利子うみ資本という言葉がその重要性のわりにはわずかにしか使用されなかったのである。肝心の金融資本概念についても、「貨幣形態の資本」としてしか示されず、利子うみ資本の「最高」形態としてのその性格や位置づけは、明確に論じられなかったといえよう。

(4) 金融資本の定義と独占規定

ヒルファディングは、既述のごとく、大銀行による独占的産業の支配、両者の融合関係を表象に浮かべ、それから抽象する形で、彼の金融資本概念を導出した。したがって、彼の金融資本は、独占規定を前提とし、それと不可分なものであった。だからこそ、ヒルファディングは、株式会社論の後に彼なりに独占理論を展開し、それを前提にして、銀行資本の金融資本への転化を説明したのである。だが、周知のように、金融資本の定義のなかでは、独占規定は明確な形で位置づけられていない。このことから例のレーニンの批判

が生じたが、我われは、定義におけるこうした独占の欠落をいかに理解すべきであろうか？ この問題は、ヒルファディングが、利子うみ資本の「最高」形態として抽象的に示される金融資本と、独占的銀行による独占的産業の支配といったその具体像との結びつきをどう考えていたか、ということに帰着するといえる。問題に対する回答は、我われにとって非常に厄介なものである。というのは、この問題に関するヒルファディングの叙述があまりに少なく、さらにこの問題にこそ、第1節で検討した彼の方法論的難点が強く現われているからである。以下の考察では、我われは、補足と読み込みを混えて、ヒルファディングの誤りや欠陥を指摘する以前に、まず彼の金融資本の抽象的規定と具体像の関係をできるかぎり明示することに努めなければならない。

前述のごとく、ヒルファディングの金融資本とは、産業資本・銀行資本・商業資本を、これらの共通項をなすことによって統一する貨幣資本 (G-G') の運動体である。そうであるとすれば、産業に投下される資本のうち、たんなる産業資本と金融資本の二つの部分³⁴⁾が並存することになる。事実、ヒルファディングは、「産業に充用された資本のますます多くの部分は金融資本である」(Bd. 2, S. 309, (2) 89 ページ) と述べ、こうした考えを示している。これは、レーニンの金融資本規定を念頭におくものにとって、一見奇異であり、さほど意味のないものであるようにみえる。産業資本の一構成部分にすぎない金融資本がいかに支配を貫徹し、いかなる形で独占規定と結びついているのか？ この点、ヒルファディングは、歴史的傾向から、「金融資本は株式会社の発展につれて発展し、産業の独占化をもってその頂点にたつ」と述べている。ヒルファディングの真意は、そのさい、こうである。つまり、彼の論理に立っていうと、金融資本は、独占形成へと向かう産業資本の傾向とともに量的に発展する。固定資本の巨大化は、産業をますます銀行の固定資本信用に依存させ、この固定資本信用の量的発展は、株式発行によって資本がいつでも動化しうるかぎり、金融資本の量的発展を意味する。産業集積と銀行集積の相互的進展は、同時に金融資本の量的発展である。独

占形成は、支配的資本としての金融資本の確立をもたらす。独占段階では、産業資本のなかで金融資本は、銀行による産業の支配に足るだけの比重を占めるのである。このように金融資本の量的発展の一定段階で、その質的变化が生ずる。そのさい、金融資本の量的発展は、「支配」を可能にする程度でよく、産業資本内で金融資本がかぎりなく比重を高める傾向があるか否かは、さほど重要な問題ではない。むしろ重要なのは、金融資本の内包的発展が一定段階に達した後では、その外延的拡大の方だと補足的にいえる。

「支配」の問題を今少し具体的に考察すると、ヒルファディングは、金融資本の定義において、「産業の銀行への従属は所有関係の結果で」あり、産業資本家に対して「銀行は所有者を代表する」(Bd. 2, S. 309, (2) 88 ページと述べている。彼がもしここで、「支配」の問題を、一般論的に、貸し付け資本や株式の所有者としての銀行の地位から説明するつもりであるならば、それは誤っている。ただ、定義では、ヒルファディングがこの問題を具体的に説明しておらず、彼の真意ははっきりしない。むしろ、「支配」の問題は、第1編と第2編で先取的に展開されている。これは、『金融資本論』の方法論的欠陥を端的に示す事実であるが、我われは今、これを問わない。散在するヒルファディングの叙述の断片を我われなりに整理すると、「支配」の問題は、貸し付け資本⁸⁵⁾の所有者、および株主としての銀行の二つの立場から⁸⁵⁾ 把えられている。

第一に、貸し付け資本の所有者としての銀行の立場についてみると、ヒルファディングはまず、銀行信用の利用が産業における競争戦の展開にとって大きな意味をもつことから、銀行業者が産業資本家に対してある種の優越性を得ると述べている。というのは、銀行は、場合によっては信用制限によって産業の運命を左右できるからである。ヒルファディングによれば、「……企業に対して銀行が優位性をもつのは、銀行が貨幣資本をもっているからである」。彼は、こうした認識にたつて、さらに、固定資本信用の授与にともなう、産業に対する銀行地位も変化し、企業に対する銀行の影響力も増大すると述べている (Bd. 1, S. 115-120, (1) 179-184 ページ)。金融資本におけ

る銀行による産業の支配は、結局、かかる一般的な議論の延長線上に、一ヒルファディングは明示していないが一つぎのように明らかにされるといってよい。すなわち、固定資本信用が巨大な規模に達し、銀行資本が産業資本のなかでかなりの比重を占めるにいたった時、つまり独占段階では、貸し付け資本の所有者を代表するものとして銀行は、産業に大きなひいては支配的な影響力を行使しうる、と。

第二に、ヒルファディングによれば、銀行は、大株主として産業に支配的な影響力をもつ。彼は、第二篇で、株式会社における大株主の支配を述べたあとで、銀行取締役がかかる立場から多数の株式会社の監査役になりうると、株式会社と銀行との人的結合について説明している。つまり、銀行は、「その貨幣資本の一部を長短いずれかの期間、株に投資することもでき」、「株式所有の支配」権を行使しうるのである (Bd. 1, S. 156-159, (1) 233-237 ページ)。この点、補足的に言えば、貸し付け資本が株式発行による産業資本の動化によって回収されうるかぎり、銀行は、固定資本信用の供与にあたって、大株主に近い地位を獲得する。また、実際に、株式発行がなされるとき、銀行は、この機会を利用して、大株主としてその支配力を行使しうる。さらにたんに一時的にでなく、銀行は、永続的な大株主ないし一ヒルファディングじしんは述べていないが一預託株式の保有者³⁶⁾として、産業に対し持株支配をなすこともできよう。

貨幣資本の所有代表者としての銀行の支配的地位は、このように多面的に理解すべきであろう。そしてヒルファディングにあっては、銀行の産業支配は、いきなり持株支配を中心とするというよりは、交互計算業務などを利用した貸し付け関係を基礎にし、持株支配によって補完する構成をとっていると考えた方がいい。というのは、その方が、固定資本信用→株式資本の動化という彼の信用制度論の基本的観点からいって自然な解釈であり、また当時のドイツの実状に即していると思われるからである。ヒルファディングのつぎのような発言も、かかる観点から理解されねばならない。

「金融資本は株式会社の発展につれて発展し、産業の独占化をもってその

頂点にたつする。産業の収益はヨリ安全でヨリ恒常的な性格を獲得する。それとともに、銀行資本を産業に投下する可能性はいっそう拡大される。だが、銀行資本にたいする処理権をもつものは銀行であり、銀行にたいする支配権をもつものは銀行株の過半数の所有者である。所有の集積のすすむにつれて、銀行にたいする支配力をあたえる擬制資本の所有者と、産業にたいする支配力をあたえる擬制資本の所有者とが、ますます同一人となることは、あきらかだ。これは、すでにみたように大銀行が擬制資本にたいする処理力をも獲得しつつあるので、なおさらである。

産業がますます銀行資本への依存性をふかめることは、さきに見たとおりだが、しかしそれは産業貴族も銀行貴族に依存するようになるということの意味するのではない。むしろ資本そのものがその最高段階では金融資本となるように、資本貴族、金融資本家は、国民総資本にたいする処理権を銀行資本の支配という形態で結合するのである。ここでもまた人的結合が重要な役割を演じる。」(Bd. 2, S. 309-310, (2) 89-90 ページ)

我われは、ヒルファディングじしん述べているように、この叙述を、銀行貴族(銀行の支配的株主)が産業に対する持株支配を通じて、産業貴族(産業の支配的株主)を従属させるという意味で、解釈することはできない。むしろ、こう解釈すべきであろう。すなわち、株式会社と証券取引所(この地位は銀行によって後退させられる)を通じて、産業の集積運動から所有の集積運動が分離し、この分離を通じて、大貨幣資本家(産業や銀行の支配的株主たりうる)が、特定企業、特定産業の枠をこえて、自由に利殖運動を行ない、ひいては、社会的総貨幣資本および産業資本にたいする銀行の支配を通して国民総資本に対する処理権を掌中にする、と。このように、金融資本における支配は、ヒルファディングにあっては、一般的な広い意味において考えられていたといえよう。

以上、我われは、利子うみ資本の「最高」形態といった金融資本の抽象的規定と独占的銀行による独占的産業の支配というその具体像の関係を論じてきた。これに関するヒルファディングの叙述は異常に少ない。その理由は、

既述のごとく、信用制度論の展開に段階的の區別を設けない彼の方法論的難点にある。この難点によって、『金融資本論』における独占理論の位置づけが曖昧になり、また、独占段階に対応した信用制度論を十全に展開する形で、金融資本概念を明らかにしえなかった。というのは、独占段階に対応する信用制度論はほとんど先取的に論じられ、肝心の金融資本の定義においてはそれが明確な形で生かされなかったからである。その結果、一方では、利子うみ資本の「最高」形態としての金融資本の性格がみえなくなり、他方では、独占に関する周囲の叙述とは異質にみえる金融資本の抽象的な定義—独占規定の欠落—が生まれたのである。ヒルファディングの金融資本における独占規定の欠落についていえば、これまでの検討でうかがえるように、それは、『金融資本論』の方法論的難点から生じた金融資本の性格規定そのものに起因している。ヒルファディングにあつては、信用制度論の展開に段階的の區別を設けないゆえに、金融資本の抽象的規定と具体像の統一は、金融資本の量的発展によって示されるよりほかはない。すなわち、独占的銀行による独占的産業の支配は、株式会社の発展と産業の独占化によって頂点に達する金融資本の量的発展の一定段階において示される以外にないのである。

この場合、『金融資本論』の方法論的性格—固定資本信用を段階概念として措定しえないような—からいって、ヒルファディングの金融資本は、その抽象的規定においては、独占を前提とするとはいへ、独占規定を含める必要はない。金融資本が産業の独占化によって頂点に達するという彼の表現は、この事情を端的に表現している。つまり、独占は、金融資本の成立や発展の前提や条件をなすにすぎない。ヒルファディングは、ここで、未熟な姿であるとはいへ、その抽象的規定（定義）のレベルでは、あたかも金融資本が独占なくして、むしろ独占以前に存在しうるような発言を行なっている。繰り返し確認するならば、『金融資本論』は、首尾一貫しているとは必ずしもいえないが、信用制度論を一般論的に抽象から具体へと展開する叙述形式をとっている。だが、資本信用→株式擬制資本→金融資本と、金融資本を導出する論理は、かかる一般論的叙述展開に解消しうるものではない。むしろそ

れは、独占段階に必然的な信用制度論の展開として位置づけられるべきであり、金融資本もかかる展開において初めて、「段階概念」として措定されるのである。こうした手続きをへないで、上述のごとく一般論的に展開すると、そこには必ず無理や論理破綻が生ずる。たとえば、金融資本における、産業への投下銀行資本の固定化の問題も、金融資本による産業資本・銀行資本・商業資本の統一の論理も、独占段階に対応したものであり、したがって金融資本は、独占をたんに前提とするよりも、それ自身に独占規定を含有するものである。ところが、ヒルファディングにあっては、独占規定は、銀行資本（利子うみ資本）を金融資本に転化させる、たんなるてこや前提条件として、金融資本概念にとっては外的存在である。だからこそ、『金融資本論』において独占理論の位置づけが曖昧になり、また、金融資本の定義でも独占規定が欠落することになったといえよう。結論的にいえば、定義における独占規定の欠落は、たんなる偶然ではなく、『金融資本論』の方法論的難点によって、ヒルファディングが金融資本を「段階概念」として措定することに失敗したことを示すものにほかならない。

- 16) 飯田繁氏は、ヒルファディングには、利子うみ資本を最高の資本物神形態とする視角がなく、そもそも利子うみ資本に対する理解が欠けていると述べている（『ヒルファディングの信用論』〈『講座信用理論体系』IV、日本評論社、1956年〉269、293ページ）。
- 17) 坂本正氏は、むしろ、「ヒルファディングの『資本信用』論を利子うみ資本論として捉え」ている（『『資本信用』と商業銀行—ヒルファディングにおける商業銀行機能の把握(2)—」〈『現代経済学の諸問題』熊本商科大学経済学部開設十周年記念論文集、1978年〉20ページ）。
- 18) たとえば、ヒルファディングは、資本信用規定を行なったすぐ後の注で、「すべての貨幣は利子をつけて貸され、したがって、貸し手にとって資本の性格をおびる」（Bd. 1, S. 109-110, (1) 171 ページ）と述べたり、第6章「利子率」の冒頭や第7章のI「配当と創業者利得」中の一節（Bd. 1, S. 139, (1) 209 ページ）で、利子うみ資本規定について簡単に言及している。
- 19) ヒルファディング信用論に関する研究文献については、坂本正「『流信用』と再生産—ヒルファディングにおける商業銀行機能の把握(1)—」（九大『経済学研究』第43巻第4号、1977年）86-87 ページが詳しい。

- 20) この点、中田常男氏は、固定資本信用の可能性の論理とその現実性への転化の論理の二つに分け、現実性への転化は、株式会社論にて初めて述べられると指摘している(『金融資本論』の論理構造)〈『商学論纂』第17巻第1号、1975年5月〉174-177ページ)。
- 21) たとえば、鈴木鴻一郎『『創業利得』について—ヒルファディングの株式会社論にたいする一つの疑問—』(楊井克巳・大河内一男・大塚久雄編『帝国主義研究』岩波書店、1959年)18-20ページ。
- 22) 野田弘英氏も、産業資本家の機能変化というヒルファディングの叙述を、「群小株主のみならず株主一般」をも対象とするものであると解釈している(『金融資本の構造』新評論、1981年、175ページ)。
- 23) これについては、森杲「企業形態としての株式会社」(北大『経済学研究』第26巻第4号、1976年4月)を参照。
- 24) 鈴木芳徳氏は、企業形態としての株式会社と信用制度の関係を、個別資本視点と社会的総資本視角の統一という形で論じている(『信用制度と株式会社』新評論、1944年)。
- 25) 後藤泰二氏の、「自己資本の他人資本化」論からするヒルファディング解釈は、この点で、ヒルファディングを少し過大評価しているように思われる(前掲書〈注7〉、とくに第2章第3章)。とはいえ、鈴木芳徳氏のごとく、つぎのように言い切るのも疑問である。すなわち、「……ヒルファディングが、株式会社を『自己資本』と『自己資本』の結合体であるとして積極的に主張する姿勢にあるのか」というと、その点はむしろ甚だ疑わしい。むしろ、支配集中機構としての株式会社理解が、たんなる貨幣資本家の集合体としての株式会社理解と、内的整合性もたぬままに混在していることが、まず直視されるべきであろう。」(前掲書〈注14〉193ページ)と。
- 26) 鈴木芳徳、前掲書〈注14〉66-67ページを参照。
- 27) たとえば、オットー・バウアーは、金融資本概念を銀行資本とほとんど同義に用いている(Otto Bauer, die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, in: Werkausgabe, Bd. 1, Europaverlag, Wien, S. 545, Einführung in die Volkswirtschaftslehre, ebenda, Bd. 4, S.671, S. 716, S. 759.)
- 28) Hilferding, die Eigengesetzlichkeit der kapitalistischen Entwicklung, (Anm. 2) S. 27, 拙訳249ページ。
- 29) これについては、拙稿「ヒルファディングの『組織された資本主義』論」(1)(北大『経済学研究』第27巻第2号、1977年5月)139-142ページを参照。
- 30) 鶴田満彦氏は、この点、ヒルファディングの金融資本が「独占的大企業の社債とか株式」にすぎず、現実の機能資本とは関係ないと批判しているが、これは正鵠を射ていない(『独占資本主義分析序論』有斐閣、1972年、46ページ)。
- 31) ヒルファディングの金融資本は、以上のごとく、共同出資ないし貸し付け資本の形

態で、産業の株式会社の現実機能資本に転化し、それでおかつ、株式資本の動化、すなわち株式擬制資本のメカニズムに支えられ、いつでも換金できるという意味で、貨幣資本（利子うみ資本）の性格を保っている銀行資本である。それは、現実機能資本と株式擬制資本（貸し付け資本は、潜在的擬制資本とみなされる）の統一として、二重化した存在である。森岡孝二氏は、この二重化した存在としてのヒルファディングの金融資本に、「幻覚」や「こじつけ」を見出している。つまり、森岡氏によれば、株式擬制資本は、銀行を媒介にしているとはいえ、すでに株主に売却されており、現実機能にしている産業資本とは無関係に運動している。だから、ヒルファディングがいうように、金融資本における現実機能資本と株式擬制資本の統一は、ありえようはずがない。森岡氏の主張は、前述の貨幣資本の二形態のうち、貸し付け資本の位置づけを軽視して、株式擬制資本に注目し、そして株式は銀行を通過して一般株主にただちに売却されるという前提のもとづいている。したがって、氏は、社会に存在する総貨幣資本を集中し所有資本家を代表するものとしての銀行の地位を過少評価しているといわざるをえない。ヒルファディングの金融資本を理解するうえで重要なのは、特定銀行と特定産業企業の関係が一過性のものではなく、恒常化し、産業資本のなかに絶えず銀行資本（貸し付け資本および共同出資の形態で）が一定の比重を占めていることにある。後述のごとく、銀行と産業のかかる恒常的關係において、貨幣資本の所有代表者として銀行は資本信用の場合でも、共同出資の場合でも産業に支配的影響力を行きわたるのである。それゆえに、株式が銀行を通過して一般株主に売却されるという観点（この場合でも株式の銀行預託を軽視すべきでない）から、森岡氏がヒルファディングを批判しているのは、的はずれというよりはかたはな。なお金融資本イコール銀行資本・産業資本・商業資本の統一といったヒルファディングの見解に対して、如上の諸資本の統一が概念的には産業資本そのものに見出されるのであり、金融資本が支配し活動する領域や部面の普遍性を諸資本の統一性をとりちがえたものだという森岡氏の批判は、貨幣資本（利子うみ資本）の「最高」形態としての金融資本という観点からすれば、まことに理解に苦しむといわざるをえない（『独占資本主義の解明』新評論、1979年、75ページおよび第6章）。

- 32) 宇野弘藏氏は、商人資本、産業資本、金融資本がそれぞれ支配的資本の歴史的タイプとして現われるという見地から、この否定の否定について、つぎのように批判している。すなわち、「少なくともヒルファディングのように『銀行資本は、高利貸資本の否定であった。そしてそれ自身がいまでは金融資本によって否定される』……というのは正しいとはいえないであろう。高利貸資本の銀行資本への転化は、銀行資本の金融資本への転化とともに、それ自身の発展による否定ではない。金融資本は資本家的産業自身の発展としてあらわれる。それもすでに綿工業を中心とする産業資本の重工業を中心とする金融資本への転化として理解されなければならない。」

と(『経済政策論』改訂版, 弘文堂, 1971年, 192ページ)。ここで、宇野氏は、高利貸し資本から銀行資本が、銀行資本から金融資本が自己発展的に生ずるとヒルファディングが述べていると解釈している。しかし、ヒルファディングは、むしろ、貨幣資本(利子うみ資本)が高利貸し資本から金融資本へとより高次の形態に展開するのであり、銀行資本の金融資本への転化も、自己発展的にではなく、産業における株式会社化と独占化を基盤としてなされると主張していたというべきであろう。

- 33) したがって、貨幣資本に対するヒルファディングの理解について、飯田繁氏が次のごとく批判しているのは的を射ていない。すなわち、「かれ〔ヒルファディング〕は、貨幣資本という同一表現のなかに包含される三つのあいことなる概念・範疇、すなわち、流通資本としての貨幣資本、蓄蔵貨幣としての貨幣資本、利子つき資本としての貨幣資本を相互にはっきりと区別することができず、したがって信用(かれの『資本信用』)の究明をこころざしながら、しかも利子つき資本の範疇とその独特な運動とをあきらかにしなかった」と(『貨幣資本と利子つき資本—ヒルファディングの『資本信用』論にたいする一批判—』『バイキング』第107号, 1957年2月) 16ページ)。

- 34) 本間要一郎氏は、年間100億の資本を充用する企業がそのうち60億を銀行から借り入れでまかなうと仮定して、次のように述べている。

「もし、ヒルファディングのいうように、『現実に産業資本に転化されている銀行資本、すなわち貨幣形態の資本』が金融資本、だとするならば、この企業の60億円は……、まさに金融資本だということになるであろう。さらには、事業債や株式発行によって資本が調達されるばあいにも、これらの社債や株式は、銀行によって引き受けられ、また所有されるばあいが多いのであるから、これもまた『産業の資本のうち、これを充用する産業資本家たちのものでない部分』にほかならない、ということになる。このようにいえば、こういう意味での『金融資本』は、レーニンの規定したそれとは、まったく似て非なるものであることがただちに了解されるであろう。」「(『金融資本にかんする若干の諸問題』『経済』No. 44, 1967年12月) 71ページ)

本間氏は、ヒルファディングの金融資本の性格をこのように捉えているが、その深い意味を考察することなく、ヒルファディングの「金融資本イコール貸し付け資本」説を唱えるのに終わっている。

- 35) 金融資本における「支配」の二側面については、野田弘英、前掲書〈注22〉第9章「金融資本の二側面」を参照。
- 36) オットー・パウアーは、銀行は、自己資本と他人の貨幣資本の管理によって、①貸し付けと②預託株式の支配権という二つの方法で、産業を支配すると述べている(Einführung in die Volkswirtschaftslehre 〈注26〉, S. 670)。
- 37) 斎藤晴造氏は、19世紀末のドイツ信用銀行の特徴を次のように述べている。すなわ

ち、「……交互計算勘定を始めとする短期信用がその基礎であり、発行業務はその結果であった。銀行と産業とを結ぶもっとも直接的な、決定的な監査役の派遣も、交互計算勘定＝短期信用→発行引受＝長期信用→経営参与という系列においてその性質が考えられるべきものであった。そしてこの『基礎』と『結末』、あるいは『要石』と『礎石』との関係を通してドイツ信用銀行の本質はこの意味では交互計算業務のなかに見出さなければならなかった。」と（『ドイツ銀行史の研究』法政大学出版局、1977年、19ページ）。

Ⅲ 金融資本と「組織された資本主義」

ヒルファディングの金融資本は、小括していえば、利子うみ資本の「最高」形態として、信用制度論上に位置づけられるものである。それは、固定資本信用と株式会社制度（株式擬制資本）を基軸にして導出されており、銀行資本・産業資本・商業資本を統一する貨幣資本の運動体として示される。それは、貨幣資本として株式擬制資本と貸し付け資本の二つの形態をもち、株式会社制度が発展し産業の独占化が進むにつれて、産業資本のなかで大きな比重を占めるにいたる。かかる量的発展傾向にもとづき金融資本は、独占段階では、産業を支配する銀行という支配的資本としての実体を得るのである。ヒルファディングは、このように、マルクス信用論を発展させるという観点から、彼独自の「組み換え」を行ないながら、いわば一つの信用概念として金融資本概念を導出し、それによって独占的銀行による独占的産業の支配といった、当時のドイツなどで顕著になりつつあった現象を説明しようとした。

しかし、ヒルファディングのかかる意図は、『金融資本論』の方法論的難点—信用制度論の展開の段階的差異を無視した—のゆえに明白に語られず、種々の解釈を許すことになった。小稿でも、彼の金融資本概念の本来の内容を浮き彫りにするために、種々の補足や読み込みを加えざるをえなかったのである。かくして一種の信用概念として、ヒルファディングの金融資本概念を浮き上がらせたのだが、ところで、これはレーニンの金融資本概念とまったく異なり、それによって是正されたり止揚されたりするものではない。むしろそれ自体として考察され検討されるべき独自の存在をなすといえよう。最

後に、小稿の本来の課題である、金融資本と「組織された資本主義」の関係について、少し立ちいって検討したい。

前述のごとく、ヒルファディングの金融資本とは、銀行資本・産業資本・商業資本を統一する貨幣資本の運動体である。それでは、この金融資本はいかなる形で上記の三つの資本を統一しているのでしょうか？ この統一をもたらすものは、抽象的な性格をもつ貨幣資本の運動そのものであり、貨幣資本はその $G-G'$ 運動において三つの資本の共通項（共通構成部分）をなすことによって、それらを統一するのである。一般論的にはこういえる。しかし、具体的に問題を考えると、かかる統一においては、銀行資本と産業資本はそれぞれ強い独立性を保持している（商業資本については、ヒルファディングは商業機能の産業資本や銀行資本による吸収によって、その独立性が失われると考えている）。また、現実的には、統一性は、たんに貨幣資本が各資本の共通構成部分になることによって無条件に生ずるとは思われない。だが、話が具体的になると、我われは、またもやヒルファディングからあまり聞くことができないのである。

これまでの検討から推察するに、金融資本による諸資本の統一問題は、金融資本の量的発展と銀行による産業の支配をとおして説明される。金融資本の量的発展は、産業資本内に占める貨幣資本（銀行資本）の比重の増大をともない、この比重の増加そのものは、支配の問題を介して、銀行資本と産業資本の融合（組織的統一性）をもたらすのである。この融合において、むしろ銀行資本と産業資本の企業的独立性したがって相対的独立性が保持されることはいうまでもない。融合は、むしろ、支配および人的結合をとおしてなされる。ヒルファディングは、産業と銀行の支配的株主の同一化傾向を通じての銀行資本と産業資本の融合を強調している。この点、彼はつぎのように述べている。

「金融資本は資本の統一化を意味する。これまでは分離していた産業資本、商業的資本および銀行資本の諸部面は、いまでは大金融団の共同指導下におかれているが、この金融団に合一して緊密な人的結合をなしているのは、産

業および銀行の主人たちである。この結合そのものの土台をなすのは、大独占諸結合による個別資本家の自由競争の止揚である。」(Bd. 2, S. 406, (2) 209 ページ)

以上のことから、金融資本による銀行資本・産業資本・商業資本の統一は、ヒルファディングにあっては、具体的には、大金融団 (hohe Finanz) による組織上指揮上の統括を意味するということがうかがわれる。ヒルファディングは、彼の論理に即していうと、この関係を、金融資本の量的発展と銀行による産業の支配との関連で明言すべきであった。彼は、これを明言せず、しかも金融資本の量的発展を金融資本による「社会経済の組織化の問題」の解決に直結させて、つぎのようにのべている。

「一般カルテルの成立への傾向と中央銀行の形成への傾向とが合致し、そして両傾向の結合から金融資本の強大な集積力が成長する。金融資本においては、いっさいの部分的な資本諸形態が全体性に統一されてあらわれる。……社会経済の組織化の問題は、金融資本そのものの発展によって、ますますヨリよく解決されることになる。」(Bd. 2, S. 322, (2) 105-106 ページ)

ヒルファディングは、このように金融資本の量的発展がかぎりなく続き、かくして「社会経済の組織化の問題」が解決されると考えるのである。金融資本は、『中央銀行』の形成にむかう銀行の集積傾向と「総カルテル」の形成にむかう産業の集積傾向の二つの基盤にたち、それらを統一することによって、より高次の集積傾向を体現するのである。したがって、組織化問題の解決の基礎は、すでに彼の独占理論において、銀行と産業における集積傾向が量的にかぎりなく続くとか、カルテル化には限界がないとかいう形で与えられている。小稿では彼の独占理論を立ちいって検討する余裕がないので、その特徴を結論的にだけ述べておくと、総カルテル形成論にみられるように、ヒルファディングは、独占における競争の止揚傾向を一面的に力説している。彼にあっては、独占が競争と対立・矛盾関係にあり、競争を止揚するものではなく、むしろ競争のあり方の新たな形態であるという理解がない。その結果、彼は、資本主義の組織化計画化がどんなに不合理で矛盾にみちたもので

あるか、いわんや生産の無政府性を排除するものではない、ということをも明らかにできなかった。金融資本における組織化も、かかる独占理解にもとづき、金融資本の量的発展が、その「完成形態」まで続き、ついには「組織された資本主義」を実現するという方向で、論ぜられるのである。

「これが敵対的形態で意識的に調整される社会である。……金融資本は、それが完成されるときには、その発生した培養土からひきはなされている。貨幣の流通は不要となり、貨幣の休みなき流通はその終点に、調整された社会に到達する。」(Bd. 2, S. 322, (2) 105 ページ)

このように、金融資本の完成形態は、「意識的に調整される社会」すなわち「組織された資本主義」の社会段階に³⁹⁾相応している。またこの完成形態への傾向は、生産の社会化の発展を意味している。

「金融資本は、社会的生産の支配権を少数のもっとも強大な資本諸団体の手にますます多くにぎらせる。それは生産の指導を所有から分離して、生産を資本主義の内部で達成されうるギリギリの点まで社会化する。……

金融資本は、その傾向からいえば、生産にたいする社会的管理の樹立を意味する。だが、それは敵対的形態における社会化である。」(Bd. 2, S. 503, (2) 836 ページ)

つまり、ヒルファディングは、金融資本の完成形態への発展傾向という形で、生産の社会化の具体的な発達を示す。そして「金融資本の社会化機能は資本主義の克服を異常にたやすくする」と述べ、それが社会主義の物質的前提をつくりだす作用をもつと指摘しているのである。

以上、我われは、「組織された資本主義」が、すでに『金融資本論』で、金融資本の量的発展の結果生ずるその「完成形態」に相応する、資本主義の発展段階として示されていると結論することができよう。ヒルファディングによれば、金融資本は、独占の発達にともない、量的にかぎりなく発展し、ついには、生産の無政府性を止揚する。つまり、金融資本は、独占による組織化にもとづき、それより高次の組織化を実現する。貨幣資本の G-G' 運動を媒介して産業資本・銀行資本・商業資本を統一するといった金融資本の

性格そのものも、資本主義のかかる組織化を容易に強調する作用をもっている。

こうしたことから、「組織された資本主義」論は、『金融資本論』と論理的に断絶したものではなく、むしろその理論的基盤を『金融資本論』に置いているといえることができる。ただし、我われは、『金融資本論』においては、「組織された資本主義」はあくまでも現実性をもたぬ抽象的な理論的仮定であったともいわねばならない。いうまでもなく『金融資本論』は、19世紀末から20世紀初頭にかけての帝国主義のいわば古典的時代を、社会主義の前段階だと考え、帝国主義戦争の「必然性」を明らかにし、それとの関連で社会主義の将来を展望した、金融資本の理論体系である。それに対して、「組織された資本主義」論は、単純に『金融資本論』と同一視しうるものではなく、むしろ、第一次大戦後に、古典的帝国主義論の予想に反して延命した資本主義を金融資本の完成形態に相応する社会主義への過渡的段階として捉えなおしたものであった。したがって、「組織された資本主義」論は、現実の変化、社会情勢が推移するなかで唱えられたのであり、『金融資本論』を基層とした理論的な上部構造をなしているといえよう。

- 38) 米田貢氏は、ヒルファディングが金融資本において銀行と産業資本の分離、並存、相互前提関係を無視し、逆に両者の一体化を説いていると批判しているが、これは正鵠を射ていない（「ヒルファディング『金融資本論』批判」〈『経営研究』第32巻第3号1981年9月〉75-79ページ）。
- 39) 星野中氏は、『金融資本論』がマルクスの集積・集中論の発展を課題としているという観点から、「金融資本の完成形態」に注目している。「流通主義」という通説的批判が勢いをえているときに、このことに注目した氏の功績は、評価しても評価しすぎることはない。しかし、『金融資本論』の主たる目的が、「金融資本の完成形態」という形で、「組織された資本主義」の実現を立証することにあったという氏の見解は、本文中に示したごとく、首肯できない（前掲論文〈242ページ注〉265-274ページ）。